



るのが近いと信じているアフマディネジャト大統領は、人間の武力行使で引き起こされる流血騒動が神の計画執行の引き金になると信じているのか、メシヤを再臨させるために、どんな強硬策をもいとわないという危険な信心を抱いているようである。言うまでもなく、イスラム教のメシヤによって安全、平和がもたらされるのは、イスラム教徒に対してのみであって、メシヤ再臨の最終舞台（宇宙の大混乱、戦争、流血）へと事態が進めば、イスラム教の大覚醒とメシヤの来臨で、西欧諸国、国連、ユダヤ人、クリスチャン等、アラブ諸国の敵は抹消されるというわけである。— この記事からも明らかなように、2005年夏にイランの大統領に選出されたアフマディネジャトは、土曜の民（ユダヤ人）と日曜の民（クリスチャン）に対して最後の聖戦を引き起こせば、十二番目のイマーム（イスラム教の聖職者）、あるいは、マハダイ、すなわち、イスラム教のメシヤの再臨を早めることができる、そのためにアラーの神に自分は選ばれたのだと信じ切っているので、この目的遂行、すなわち、世の終わりを早め、全世界をイスラム教国にするために必要なことは手段を選ばず用いるという恐ろしい盲信に陥っているのです。

詩篇83篇は神を憎み、心を一つにして悪巧みをしているイスラエルの敵どもが、「神の牧場をわれわれのものとしよう」と、神がイスラエルに約束された地を分割して奪う策略を立てていると語っていますが、これは、エゼキエル書、ヨエル書、ゼカリヤ書にも預言されていることで、皮肉にも今日、イスラエル、パレスチナ間の平和協定を推し進めている国々は、イスラエルの領土を1949年の時点に戻そうと図っているのです。すなわち、エルサレムの西の城壁、神殿の山等を含む東エルサレムはアラブ人の手に、ウエストバンク、ガザ、ゴラン高原はエルサレム国家承認後も、当時、エジプト、シリア、ヨルダンの管轄下に置かれていたのです。ダニエル書はキリストの再臨の直前に世界に平和をもたらすかのように登場するカリスマ的な指導者、反キリストなる人物も、彼を支持する有力者たちに代価として国土を分け与えると預言しています。詩篇83篇で悪巧みを図る者たちは、エドム、イシュマエル人、モアブ、アモン等、イスラエルと血縁関係にあるセム族のアラブ人と、ツロの住民、ペリシテに象徴される異邦人をも含めたカナンに地に住む民、すなわち、パレスチナ人に加え、「アッシリヤ」に象徴される反キリストなる人物、世界的独裁者です。また、エゼキエル書38、39章は、ゴグを指導者とする民マゴグが、平和協定に安心して住んでいるイスラエルを突然攻撃し、このときゴグにペルシャ、クシュ、プテ、ゴメル、ベテ・トガルマが荷担すると語っています。これら創世記にすでにその名が登場する国々は今日のイラン、スーダン、リビア、アルメニア地方に当たり、マゴグに象徴されるのは黒海とカスピ海にはさまれたロシアの地域で、地理的にはイスラエルの四方に離れて位置しているのですが、興味深いことにすべてイスラム教原理主義者たちに統括されている一帯なのです。ロシアの南端は今日紛争の絶えないチェツニアを含むイスラム連邦共和国で、トルコは公的には世俗国家とみなされていますが、イスラム教原理主義に基づく与党が国家権力を握っており、イランはじめスーダン、リビアもイスラム教原理主義者によって支配されている国々です。イスラエルの神、イスラエルの民、イスラエルを支持する者たちを敵とするこれらの国々【あるいは、自分たちの神を信じない者たちの抹消を正当化する（イスラム教の正典「コラーン」の教え）、言わば、殺人を正当化するサタンを神とする信奉者たち】は、神の民イスラエルを消し去ろうと奇襲を試みるのですが、エゼキエル書は神ご自身がこれら敵どもを撃退されると預言しています。人間レベルでの軍事力、陰謀云々が勝敗を決めるのではないのです。

これら敵どものイスラエル侵略は神ご自身のご介入によって敗北に終わりますが、このような攻撃を神が許されるのは、彼らが「その名、主であるあなただけが、全地の上にあります」と高き方であることを知るためなのです。預言者エゼキエルは神のご介入の手段がイスラエルの地に起こる「大きな地震」であり、それによって敵が「同士討ち」を始めるような混乱が起こると語っています。昔、高き所におられる神に挑戦して天にまで届くバベルの塔を一致団結して築こうと計らった者たちが言語を乱すという神のご介入によって分裂、四散したように、異なった言語を話す者たちによって結成された連合軍も大地震、豪雨、雹の襲来、ゴラン高原の火山爆発という自然の脅威の前に、敵味方が分からなくなる大混乱に陥るでしょう。さらに追い討ちをかけるように、「疫病と流血」が敵どもを襲い、詩篇の著者が願い求めたように、彼らはイスラエルの神こそ、真の主であることを多くの国々の見ている前で、知らされることになるのです。聖書の語る、人類の創造者なる真の神は、自らの宗教を守るために殺人を正当化し、奨励する神では決してなく、敵をも含めたすべての人間が自らが神の庇護の下にしか生きられない小さな存在であることを知り、神に対するすべての反逆から立ち返り、罪を悔い改め、「御名を慕い求めるように」なるために、忍耐強く救いの御手を差し伸べておられる“愛”の神です。偽りの神々を信奉している者たちは、偽り、はかりごと、武器を用い自分たちの力で信念を成就させ、自分たちの宗教を人間的な手段を講じて他人に認めさせようとしませんが、真の神はご自分に属する者をよく知っておられ、真理を追究するがゆえに、また真の神に忠実であるがゆえに敵に苦しみあえぐ者を、ご自身の力で救ってくださるのです。人は訓練、忍耐の期間を好まないのだから神のご介入、救いのタイミングを待つことができず、往々にして自力で神の約束、ご計画を達成させようとしがちですが、これは神への不信仰の現われで、人間史は実に不信仰の繰り返いで彩られてきたのです。しかし、神ご自身が人間史にご介入され、罪の歴史に終止符を打たれるときが確実に近づいているのです。